

ま え が き

本書は、アジア経済研究所において実施した「タイの立法過程とその変容」研究会（平成21～22年度）の成果をとりまとめたものである。

1990年代から順調に進んできたかにみえたタイの民主化は、2006年クーデタによるタクシン・チンナワット首相の追放によって頓挫した。2007年憲法の制定によって議会制民主主義は復活したものの、タクシン元首相を支持する勢力とそれに反対する勢力との政治対立による混迷からタイはなかなか抜け出せないでいる。2001年以降の選挙でつねにタクシン派が勝利してきたが、反タクシン派は政治腐敗を理由に選挙による正当性を否定する主張を繰り返しており、選挙・議会を通じた政治的リーダーシップの確立という代表制民主主義の大前提が大きく揺らいでいる。2010年3月から5月には、タクシン元首相を支持する「反独裁民主主義統一戦線」(UDD)がバンコク中心部を占拠し、それを排除しようとする軍との衝突で、デモ参加者・軍人だけでなく、無辜の市民を含む92人の死者と1000人以上の負傷者を出した。両者の対立は一時内戦の様相を呈し、取材にあたっていた日本人カメラマンが銃弾で命を落とした。強制排除後には市内各所で放火による黒煙が上がり、いつもは観光客も賑わうショッピングセンターが無残に焼け落ちた。

その後、民主党のアピシット・ウェーチャチーワ政権は、国民和解のためのロードマップを掲げ、政治対立の解消を目指したが、連立を組む他の政党の圧力のなかで下院を解散。2011年7月総選挙では、タクシン派のタイ貢献党が圧勝し、タクシン元首相の妹のインラック・チンナワットがタイで初の女性首相に就任した。インラック政権は、アピシット政権と同様に国民和解を訴えるが、総選挙の結果からは、バンコク、タイ南部では依然として民主党支持が強いことが鮮明であり、政治対立の解消は容易ではない。

政治的混乱のなかで議会の立法機能はこの時期に大きく低下し、たとえば、2010年に公布された法律の数は28にすぎなかった。このような時期に、タイの立法過程を問おうとする本書の試みは的外れにみえるかもしれない。しかし、法治主義国家であるかぎり権力は法律に基づかなければならないし、民主主義をとるかぎり法律は議会の承認を必要とする。タイの立法過程の特質と課題を明らかにすることは、議会政治の再生・安定化を模索する上で不可欠な作業であると考ええる。

他方、1990年以降、民主化・経済社会のグローバル化を背景にタイはさまざまな制度改革に取り組み、それにともない議会改革など立法に関係する制度整備も進めてきた。注目すべきは、経済社会の変化を背景にさまざまな社会運動・市民運動が活発化し、そのなかには特定の立法の実現を目標とするものが多くみられるようになったことである。これと呼応するように、1997年憲法以降、参加型民主主義や国民の政治参加といった理念が強調されるようになり、国民による直接の法案提出など具体的な制度の構築へとつながっていった。議院内閣制をとるタイにおいては官僚組織によって起草される政府立法が、国会で可決される法案の大多数を占めており、国民の直接的な政治参加の拡大を目指した諸改革が既存の立法過程を突き崩すものとなるのかはまだ定かではない。しかし、一連の制度改革が急速な経済社会変化のなかで既存の代表制民主主義に対して国民が感じている閉塞感に 대응していこうとする試みであるとするれば、その分析はタイと同様に急速な変化に直面するほかのアジア諸国における立法を考える上で、有益な視座を提供するものと考ええる。

本研究会には、法律学の研究者を中心に政治学、社会学の研究者が参加した。タイの法制度、政治・行政過程における文書の量は膨大であり、本研究会はそのようなタイ語の一次資料を利用することのできる研究者で構成された。また、本研究会では、チューラーロンコーン大学法学部と海外共同研究を行った。研究代表者のサクダー・タニットクン氏（チューラーロンコーン大学法学部准教授／学部長）、共同研究者のパコーン・ニンラプラパン氏（法制委員会事

務局常任立法委員)は、タイの立法実務・立法制度改革に長年関わってきた方々であり、この共同研究を通じて私たちはタイの立法の実態について多くの知見を得ることができた。この共同研究の成果は“Legislative Process in Thailand” (Joint Research Program Series)として、アジア経済研究所から公刊されたのであわせてお読みいただければ幸いである。成果の一部は、本書のなかでも用いられている。また、本研究会においては、スパサワット・チャットチャワーン氏(タンマサート大学政治学部准教授)から2006年クーデタ後のタイの政治変化について、鈴木絢女氏(福岡女子大学専任講師)からマレーシアの立法過程についてご教示をいただいたほか、匿名の査読者からは多くの貴重なコメントをいただいた。ご協力をいただいた方々にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

2011年10月

編者